

「オーストラリア短期語学セミナーと日本語アシスタント」(塚本麻衣)

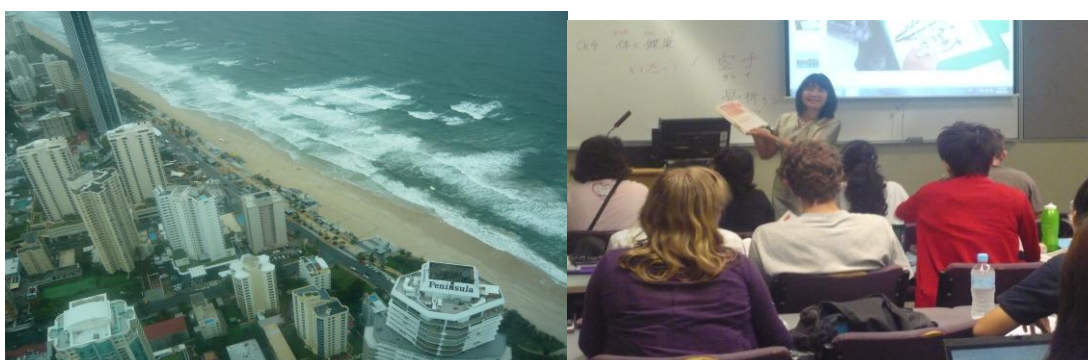
GMS学部3年の塚本麻衣さんは、駒澤大学の短期語学セミナーを利用して、オーストラリアのブリスベンにあるクイーンズランド大学(駒澤大学の協定校)に、5週間の英語語学研修に出掛けました。

ブリスベンはオーストラリア第三の都市ですが、世界的に有名なビーチリゾートのゴールドコーストに近く、豊かな自然を誇る美しい街です。またクイーンズランド大学はオーストラリアのトップクラスの名門大学であり、ノーベル賞受賞者も輩出しています。

このクイーンズランド大学と駒澤大学とのつながりは深く、毎年多くの駒澤大学学生がクイーンズランド大学に留学を行っています。またクイーンズランド大学からは、毎年複数の学生が、駒澤大学に留学に来ています。さらにクイーンズランド大学で留学プログラムに関わってくださっている日本人の内山加代子先生は、御主人が駒澤大学GMS学部にて専任教授として勤務されていたご縁(2010年3月に定年退職)もあり、駒澤大学学生の留学を大変歓迎してくださっています。

今回短期語学留学を行った塚本さんは、クイーンズランド大学の内山先生のご厚意により、英語を学ぶ傍ら、内山先生の日本語クラスにアシスタントとして参加してきました。英語を学ぶだけでなく、日本語を学ぶオーストラリア人学生との交流を深めることができたことは、塚本さんの留学生生活をより豊かなものとなりました。

以下は、塚本さんにお聞きした内容です。



Q1. 海外研修のきっかけは何でしたか？また、なぜたくさんある候補地の中でオーストラリアに行くことを決めたのですか？

入学前より、大学生になったら一度は留学をしたいと思っていました。無事に大学に入学した後、留学方法を色々考えた結果、一番安心で手続きも簡単だと思った大学のプログラムで行くことを決めました。駒澤大学の英語圏への留学制度には複数選択肢があったのですが、私の予定や経済的な都合(*注:塚本さんは、留学費用を少しずつアルバイトでためていました)で一番早く

行ける時期が2年生の春休みでした。その期間にあったプログラムの中の 하나가、このオーストラリアのものだったので。また、研修先のクイーンズランド大学は長い間駒澤大学と提携していると聞いたことも、安心して繋がり決め手のひとつになりました。



Q2. 渡航前の準備として、何かしたことはありますか？

GMSの必修の英語の授業を頑張りました。私は必修英語クラスを全て履修し終えてからの出発予定だったので、2年間この授業に一生懸命参加して、自分の英語力を高めていました(*注：GMS学部では1、2年生の英語の必修クラスとして、スピーキングが4クラス、リスニングが1クラス、ライティングが3クラスあり、20名以上の英語ネイティブスピーカー、もしくはバイリンガル教員が指導にあたっています)。



Q3. 今回の研修に費やした費用は、いくらくらいですか？

プログラム自体の費用は38万円でした。しかし、留学のために奨学金(返済不要)を16万円頂いたので、実際には22万で参加できました。

この奨学金は、駒澤大学と協定校のクイーンズランド大学との相互交流支援として、文部科学省より支給されたものです。両親のお金でなく、自分のお金で留学しようと思っていた私には、とてもありがたいものでした。

Q4. 現地では、どのようなところに宿泊していたのですか？ また、食事は口に合いましたか？

5週間ずっとホームステイでした。私のお世話になったお家は、高校の先生をされている女性のお家でした。私はその女性と5週間2人暮らしでした。お家はキレイなお庭のある一軒家でした。



食べ物の好き嫌が多い私（*注：塚本さんは、乳製品や生野菜が嫌いとのことです）は、ホームステイをするのが不安でした。しかしホストマザーは食事はなるべく私の苦手なものは使わないで用意してくれたので、何も困ることはありませんでしたし、美味しいものばかりでした。

夕飯は基本的にお肉がメインで、そのほかにサラダとベイクドポテトを付け合わせるのがほとんどでした。特別変わったメニューがあるわけでもなく、日本で食べるものとさほど変わりませんでしたね。

Q5. 現地では、どのようなスケジュールで毎日を過ごしていたのですか？

平日は、金曜を除いて朝9時から午後まで授業で、金曜日だけは午前中で授業が終わりでした。土日は授業がなくフリーだったので、ビーチに行ったり、cityで買い物をしたり、公園でBBQをしていました。

基本的にホストファミリーか大学で友達になった現地の学生と遊んでいました。



Q6. 一緒にプログラムに参加したクラスメートには、どのような人達がありましたか？



クラスはだいたい15人～20人の少人数クラスでした。私のクラスメートの約半分が日本人で、それ以外はイタリア、サウジアラビア、クウェート、韓国等、計8カ国から来ていました。年齢も高校生から社会人までバラバラで、話していて楽しかったです。彼らとは今でもフェイスブック等で連絡を取り合っています。

Q7. 現地での心温まるエピソード等ありますか？

ある日、私が乗るバスを間違えてしまい、見知らぬ土地で降りて困った時の話です。折り返して元の場所に帰れそうなバスが無いか時刻表を調べたところ、そこで一時間以上はバスを待たなければならないことが分かりました。



仕方なく大通りまで数キロの距離をとぼとぼと歩こうとしていたところ、ちょうどそこに一台の回送バスが通りかかりました。バスの運転手さんは不安げな私を見つけ、停車して声をかけてくれました。私は、その運転手さんに事情を説明しました。するとその運転手さんは私にバスに乗るよう促し、私を近くの駅まで無料で乗せて行ってくれたのです。わざわざ外国人の私に話しかけてくれ、助けてくれたことが私にはとても嬉しく、何度も運転手さんにお礼を言いました。

Q8. 現地で受けたカルチャーショックは、何かありますか？

カルチャーショックというほどのことではないのですが、現地でのライフスタイルには少し驚くことがありました。オーストラリアの朝はとても早く、職場に出かけるよりも数時間も早く起きて、エクササイズや仕事をこなすことから始まります。そして夕方は残業などをせず早めに帰宅し、寝るまでの時間をゆっくりくつろいで過ごし、早めに就寝して翌朝に備えるのです。ホストマザーになぜそんなに早寝早起きなのか聞いたところ、「みんな夜にだらだらと残業をするくらいなら、朝早く起きてやった方が良いと思っているからだ」という答えが返ってきて、夜型生活をしてきてきた日本人の私には衝撃的でした。



Q9. 英語学習以外に、現地の大学で行った活動等がありますか？

クイーンズランド大学の日本語の授業に参加したことです。私は毎週火曜日に自分の授業が終わった後、クイーンズランド大学の学生が学ぶ日本語の授業に、先生（*注：前述した内山加代子先生）の助手としてボランティアで参加させて頂いていました。



内容は、私たちが受けてきた英語の授業の日本語バージョンといった感じでした。

自分がいつの間にか修得していた言語を外

国の人が頑張ってる姿をみて、私のネイティブスピーカーの英語の先生も、きっとこんな気分で授業をしているのだろうなと不思議な気分がしました。

日本語クラスの学生達は、私に日本語で積極的に話しかけてくれたり質問してきてくれたりしました。どのように説明したら分かってもらえるかなど戸惑うこともありましたが、とても楽しくて貴重な時間でした。

Q10. 今回の研修は、塚本さんの大学生活や今後の人生においてどのように生きてくると思いますか？

ブリスベンの街は世界各地からの移民で構成されていて、私にはとても刺激的な毎日でした。この経験を通じて、これまでとは異なる様々な価値観に触れることができ、またこれまでに比べて異文化に対して寛容になれたように思います。

このような異文化に対する寛容性は、今後私が社会に出て様々な人と出会い一緒に仕事をするときなどに、生きてくると思っています。

Q11. 最後に、これから海外研修を行いたいと思っている人へのアドバイスやメッセージをお願いします。

自分の慣れた土地とは違うところに行って生活していくことは、期待と同時に不安も大きいと思います。私も同じで行く前も不安で、行ってからも最初は落ち着かなくて大変でした。でも少しずつ頑張ってるうちに、「まだ帰りたくない」とか「もっとここにいたい」と思うほど楽しくなっていました。留学で異なる環境に行くことで、今までより自分を客観的に見つめることや、それまで自分に無かったものを得ることができると私は思っています。私にとってこの5週間はとても充実したもので、忘れられないほど濃い大切な思い出です。

行こうか悩んでいる人は、ちょっと無理をしてでも行ってみると、思っていた以上のものを見つけられると思いますので、ぜひ行くことをオススメします！今しかできないこと

を後悔のないようにチャレンジしていきましょう！



おわり

(聞き手&文責 GMS 学部講師 杉森建太郎)